

『方便から真実へ 浄土真宗』より抜粋

119 二種深心が徹底した人は、三品の懺悔をするのでしよう。

その人が浄土真宗の人で、感情が涙を流して法に調子を合わしている人が浄土真宗の人でしよう。

解説Ⅱ罪悪深重、煩惱熾盛と聞き覚えただけで罪の自覚のない人は、懺悔も通り一遍にすぎません。本人の程度ですから一概には言えないけれども、『和讃』に

真心徹到するするすは
金剛心なりければ

三品の懺悔するひとと
ひとしと宗師はのたまえり

とありますが、下品の懺悔は、全身から汗を流して懺悔する、中品の懺悔は、全身から汗を流し、首から上は血を流して懺悔する、上品の懺悔は、全身の毛穴から血汐を流して懺悔す

るとありますが、全くその通りであります。素直に聞いている人たちにはこんな苦しさがな
いから、天地が転倒するほどの大慶喜がないのです。私は、学生時代には涙を流しては、
こんな悪性を唯で助けてくださるとは、なんと尊い教えであろうかと感激し懺悔していまし
た。いよいよ（研究科）大学院を卒業する間際に、母から、「学校は卒業さしていたただくの
ですが、信仰の卒業をしましたか。開発しなくて説教をしたら、追剥ぎよりもまだ悪いで
すよ」と手紙をもらって、必死の求道になりました。信仰に卒業があるものかと思われま
しょうが、報謝には息を引き取るまで卒業はありませんが、信仰には卒業があります。卒業
がなかったら、安心はありません。『御文章』に「すでに信心を獲得せしめたる人もあるべ
し、また不信心の輩もあるべし、もつてのほかの大事なり」、これほど一大事はありません
が、あなたは往生の一大事の解決がつかましたか。仏さまがご承知、あなたは、私は知ら
ん、無責任ですね、行者正しく金剛心を受けるとありますよ、出ていく後生は気にかかりま

せんか。いままでは法のお手元ばかり見て有難がっていました。出ていく後生となった
ら、知らん顔をしている機が出ていくのですが、覚悟はよいですか。たとい罪業は深重なり
とも必ず救うとおっしゃってある、救われましたか、死んでから救われる、今は、今はどう
もない。今どうもなれない者が、死んでどうして救われるのですか。仏力不思議で、仏力
不思議に遇いましたか、死んでから。現在の延長が未来ですよ、今救われていないものが、
死んでどうして救われるのです。それは因果が矛盾してはいませんか。死んで五十二段を
超証さしていただく人間なら、この世で正定聚の仲間入りといって晴れて満足しているの
ですよ。煩惱があるからそんなことはできない、いま助かっているものが、死んで夢を見
ているのではありませんか。それから私は必死の求道となり、寝食を忘れて、卒業論文も
放棄して求道したのであります。

是山和上、雲山和上について勉強すればするほど、総会所に参詣して聞けば聞くほど、あ

りがとうない平気な心が見えてくる。後には後生とも菩提とも思わない、信仰に反対し反抗する心が照らしだされてくる。こうまで馬鹿とは思わなかったが、自分には宿善がないのだから、あれだけ易くいただけでいた信仰が総崩れ、熱心になればなるほどわからなくなり、真剣になればなるほど知らぬ顔した心がでてくる、仏さまに近寄ろうとすればするほど遠ざかる心が見えてくる。仏法を聞けば有難くなれると思っていたのが大間違いで、有難くもなければ嬉しくもない。仏法を聞かぬ昔の心の方が上等で、今は仏とも法とも思わぬ心がでてきて、仏さまと縁が切れたような気がしました。

ほうとうに求道された方なら、必ずこの心境を通ります。なぜかといえ、今までは有難い感情が聞いていたのですから、あれも御恩、これも御恩と有難いものを見て喜んでいただけますけれども、今は自性が見え始めたのですから、法に接近すればするほど、素地が照らし出さるるのです。仏とも法とも思わぬ、本性の奴が見えてきたのです。仏さまに近寄れば

近寄るほど、仏さまと反対の心が私であるとし知らさるるから、これではいけない、これではいけないと真剣に求めるのです。いよいよ遠ざかりきつた時が、絶対の悪です。何れの行も及び難き身なればと望みの綱が切れた時が、自力の手が離れるのです。それは三定死の境地に立たされたときであります。

うんともすんとも動かぬ心が照らし出されたとき、自分の努力、真剣さは反省せず、親を呪うのです。親が私を僧侶にしなかつたら、こんな苦勞はないはずだ、私が庄松さんや

清九郎さんのような馬鹿であつたら、早く開発して救われるのにと恨んでいる心が、五逆（親殺し）と知らなんだのです。阿弥陀さまは十劫已来立ちつづけたといわれるけれども、

私ひとりをどうすることもできないのなら、不思議の仏智でも何でもない、お釈迦さまは八千遍の御苦勞と聞くが、私ひとりを見逃がしたのであるうか。聖人さまは他力不思議だ、大願業力だと教えられても、私はなんともない、こんな苦しい目に逢わして、どこに他力が

あるのだ、なにが不思議だと悪口をいい、逆振を掛けているのが、謗法とは知らなんだので
す。頭の方はいま死んだら大事ぞ、早く早く急がないと臨終は迫っているではないか、とあ
わてているけれども、腹の底は当分死なないと平気でいるのが闍提とは知らなんだのです。

この五逆、謗法、闍提の三つを教化ができない、療治ができないと、涅槃経の中から捨て
てあることも知らないで、ただ感情だけが法に調子を合わせて喜んでいたのであったか、あ
れが二十願の贖物の信仰とは知らなんだ。心の底には、打つても叩いても、まだ死にはせぬ
と平気な顔をしている横着者が、逆謗の屍といわれたのだ、私はお浄土などの望める柄では
ない、鬼が鬼になるのなら元々であったと知らされたときが、地獄は一定住家ぞかしと切り
落とされたのが、絶対の悪性です。それが阿弥陀さまの狙いの的ですから、ここまで進まな
ければ絶対と絶対のピン트가合わないのです。

そのときの心境は言葉にかけられない。三千世界が火の海のような猛火に包まれて、息をす

ることでもできない苦しきです。無間のどん底に投げ込まれた思いと同時に、我能く汝を護ら
ん、すべて水火の難に墮せんことを畏れざれの声なき声に飛び上がったも飛び上った、六
畳三間続きの下宿の二階で飛び歩いて踊り舞いをして、唯であった、ただであった、
無条件とはこのままか、三千世界の果報者、この逆謗の屍のままが五十二段とは、私を離れ
て弥陀がない、弥陀を離れて私がない、南無阿弥陀仏なむあみだぶつ、こんどは頭を畳に擦
り着けて、よくもよくも大地が破れなかつたこと、よくも口が裂けなかつたこと、この謗法
の親玉を捨てず裁かず、無条件で撰取していただいたとは、この機が本願の正客か、これを
生かすための五兆の願行であつたのか、どうして御恩に報いることができるだろうか、八つ
裂きに逢うてもまだ足らぬ悪性を、罪を赦されただけでも破格であるのに、正定聚不退の
位に住し、大般涅槃の妙果を得るとは、不思議の中の不思議ではないか、頭を叩き胸を叩
き、涙も鼻汁も手ばなしで泣ききつたときは、全身から血汐を噴き出して懺悔をすると同様

に、素直すなおに聞きいておいでになる方々かたがたには、こんな恐ろしい凄すごい罪業ざいごうを体験たいけんされたのだから、
か、こんな不思議ふしぎの妙境界みょうきょうがいを感得かんとくされたのだろうか、この聞即信もんそくしんの一念いちねんに十方法界ぼうほうがいを全領ぜんりょうする他力廻向たうりきえこうを諦得たいとくされたのだろうか。これは愚図愚図ぐずぐずしてはいられないぞ、聖人しょうにんさま、あなたは七百年ななひゃくねんの古いにしえにこんな不思議ふしぎの世界せかいを諦得たいとくされたから、総攻撃そうこうげきをもとめせず進撃しんげきされたのでございますか。私も真仮わたし しんけの水際みずぎわを実地じつちに教おしえて信樂開発しんぎょうかいほつするまで指導しどこうさしていただきませう。晴れたのやら暮れたのやらわからない曖昧あいまいな信仰しんこうは、第二十願だいに がんの桁けたで浄土じょうど仮宗けしゅうでありますから、実地じつちの求道きゅうどうを教おしえて金剛堅固こんごうけんごの信心しんじんの定まるまで指導しどこうさしていただきませう。